【七夕】
天の川五色にかざし笹につけて何の願ぎごと十五なりしか　柳原白蓮『幻の華』　1919年
七夕に入院すれば廊の先をさならの願ひ揺れてゐるなり　佐藤モニカ『白亜紀の風』　2021年

■八月
【土用丑の日】
宣言の効果は知らず密を避け土用鰻の店を過ぎたり　服部崇『新しい生活様式』　2022年
【盆】
しろがねの星は流れて松明を手にかざしゆく盆の送り火　晋樹隆彦『秘鑰』　2004年
【燈籠流し】
吾が被爆してより五〇年目の街に妻と来て見る灯籠流し　西田郁人『漂鳥』　1998年
【二百十日】
二百十日の朝あけの空に町尻の工場の笛ひきもまれ居り　新井洸『微明』　1916年

■九月
【月見】
日の暮れと丘に火焚きて百人が古国明日香の月見むと待つ　前川佐美雄『白木黒木』　1971年
【秋分の日】
秋分の日の沖を行く白雲は聖なるもののごとき静けさ　佐佐木幸綱『滝の時間』　1993年
【彼岸】
春ける彼岸秋陽に狐ばな赤々そまれりここはどこのみち　木下利玄『みかんの木』　1925年

■十月
【運動会】
運動会スタートラインに立ちし子が新しき顔我に見せたり　山口明子『さくらあやふく』　2012年
山からは山の匂いが流れきぬ／定時制高校の夜の運動会　奥田亡羊『花』　2021年
【ハロウィン】